

【神奈川】50代半ばでの新天地は「チャンス」、院長要請引き受ける-明石嘉浩・聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院院長に聞く ◆Vol.1

若手時代は循環器内科で臨床に没頭、心臓リハにも注力

2025年8月18日（月）配信 m3.com地域版

聖マリアンナ医科大学循環器内科の主任教授を務める明石嘉浩氏が2025年4月、同大横浜市西部病院（旭区）の院長に就任した。打診があった当初、教授との兼任が可能か一抹の不安があったというが、同大学病院副院長の経験も振り返り、「50代半ばでの新天地はそうない。これはチャンス」と前を向いた。開業医だった父に憧れた子どもの頃、臨床に没頭した若手時代、医師としての価値観の変遷——。半生を振り返ってもらった。（2025年7月3日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



明石嘉浩氏（病院ホームページから引用）

開業医の父に憧れ、ある本と出会い医療の奥深さ知る

——明石先生は1996年に聖マリアンナ医科大学医学部を卒業しました。まずは、医師を志した理由をお聞かせください。

医師だった父に憧れたことと、ある本を読んで医療の奥深さを知ったことが挙げられます。父は耳鼻科医として東京で開業していたのですが、クリニックが自宅に併設されていたため、私は幼少期から父の診療する場面を目にしました。地域の診療所なので難しい治療を行っていたわけではありませんが、細やかな手技で患者さんのつらさや痛みを軽くしている父の姿を見て、「ああ、お父さんは喜ばれる仕事をしているんだな」と子どもながらに感じるものがありました。

感銘を受けた本は高校の頃に通っていた塾の先生からいただいたもので、2冊あります。一つが、淀川キリスト教病院名誉ホスピス長である柏木哲夫先生の終末期医療をテーマとしたもので、もう一つが「医学教育の父」と言われるカナダ生まれの医師、ウィリアム・オスラー先生の講演集『平静の心』です。柏木先生の本を通してホスピスの存在を知り、医療には積極的な治療ばかりでなく、死を間近にした患者さんの希望に寄り添っていくものもあることに深みを感じました。一方、『平静の心』では、医師として「感情に左右されず、常に冷静であること」「客観的に状況を把握すること」の大切さに何度も触れていました。手技が医師の主な仕事だと思っていた当時の私は、「いやいや、これはもっと奥が深いぞ」と興味が高まったのです。

睡眠時間は2、3時間、それでもとても充実した日々

——大学卒業後は循環器内科を専門にし、2010年に同大内科学（循環器内科）の准教授に、2013年に同科の教授に就任します。なぜ、この診療科を選んだのですか。

大学5年の頃に心電図を読む面白さを知ったことがきっかけです。心電図の判読は学生からすると難しいイメージがあつてあまり人気がないのですが、私の場合、指導を担当した先生がとても分かりやすくその方法を教えてくれました。通常の授業では膨大な情報を2、3時間でたたき込みますが、その先生は情報の似た部分を単元として7、8回に分け、時間をかけて丁寧に教えてくださいました。少人数での授業だったことも良く、私は面白く読めるようになりました。6年になると今度は自分が5年生に教え、知識と技術をより自分のものにしていきました。

大卒として、診療科の特性にも引かれましたね。循環器内科では医師が直接、患者さんの命を救うことができます。心臓が止まりかかった人を治療によって助けられる。医師としての成長が患者さんへの貢献に反映されやすいことも魅力に映りました。

——先生は同大や都立広尾病院に勤務し、ドイツ留学も経験しています。医師として印象に残っている時期はいつですか。

留学前の3年間は濃密でした。都立広尾病院に勤務した2002年から2003年、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院に勤めた2005年までです。この期間は臨床に没頭しました。カテーテルなどの治療技術が向上していくのが楽しく、患者さんが喜んで退院する姿を見られるとうれしさがこみ上げます。すると、「もっと上達したい」と思うのです。医師の働き方改革が進む今だと怒られると思いますが、当時は寝る間を惜しんで仕事をしました。研究や論文執筆も並行して行っていたので、1日の睡眠時間は2、3時間。それでも、とても充実した日々でした。

——そして、2005年からドイツのベルリン大学心臓血管研究センターに留学し、2007年に帰国します。

帰国してから、また新たな循環器内科の魅力を体感しました。心臓病の患者さんには病気を抱えながらも長期にわたって生活を継続できる人がたくさんいます。がんなどに比べて、緩やかに終末期に向かうケースが多いのです。臨床の場で猛烈に働いていた時から少し経っていたことも影響していると思いますが、患者さんと長くお付き合いできることに改めて気づき、父の姿や先に挙げた柏木先生の本が思い返されました。「ああ、これだこれだ。自分が理想としていた医療だ」と手応えを得られるようになりました。

近年、循環器疾患における緩和ケアの重要性が指摘されていますが、私は以前から心臓病の再発を防ぐためのリハビリテーションにも注力してきました。手技に重きを置いていた若手時代から、医師としての在りようもだいぶ変わったと思います。

未知の仕事への挑戦「ほとんどが貴重な経験に」

——その後、聖マリアンナ医科大学病院の副院長を経て、2025年4月に聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院の院長に就任します。この経緯と就任が決まった時の率直な感想はどんなものだったのでしょうか。

前院長が大学の診療科の主任教授に就任するため、院長を退任することが決まりました。それが2025年1月20日あたりで、数日後に法人理事長から私に院長就任の打診がありました。今もそうですが、私は循環器内科の主任教授を務めているので、率直に言うと「兼任できるのか……。困ったな」という思いでした。それで、結論を出すために1週間ほどいただきました。

考えてみると、私はそれまでにさまざまな経験を重ねてきました。管理者としては聖マリアンナ医科大学病院の副院長も務めました。「やってみないと分からない。そして、やってみるとそのほとんどが貴重な経験になる」と実感している自分がいきました。50代半ばで新しい環境に身を置ける機会はそうありません。「これは与えられたチャンスだ。よし、やろう」と決断しました。

1996年聖マリアンナ医科大学医学部卒。2010年同大内科学（循環器内科）准教授、2013年同教授に就任。2020年聖マリアンナ医科大学病院副院長。2025年4月から聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院院長。日本内科学会認定内科医・指導医、日本循環器学会循環器専門医、日本心臓リハビリテーション学会心臓リハビリテーション認定医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

